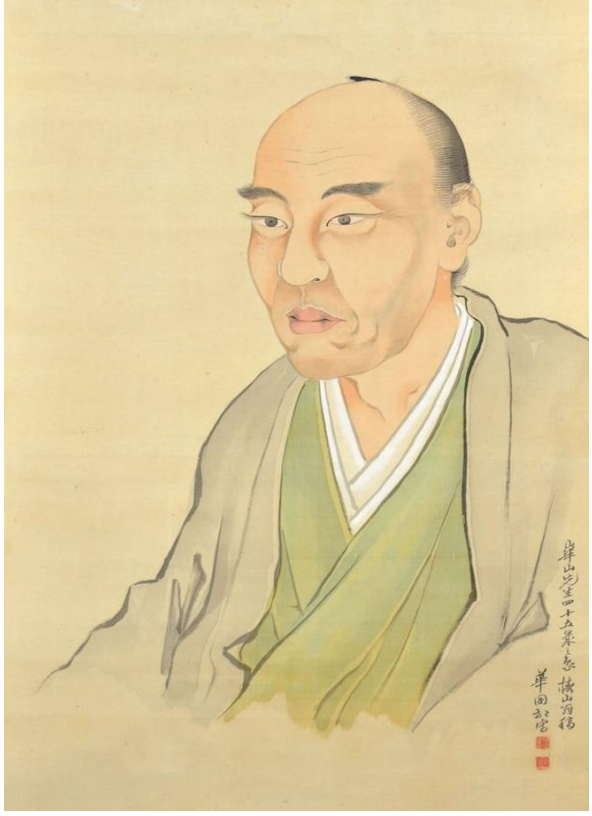

鏑木華国による「椿椿山の崋山像」模写

崋山と歩く桐生と周辺の旅

江戸時代後期の武士であり、洋学者、思想家、そして画家としても傑出した才能を示した渡辺崋山。寛政５年（1793）、父・定通と母・栄の長男として生まれ、三河国田原藩（現在の愛知県田原市東部）の藩士として２０代から絵で名を挙げた。

二歳年下の妹・茂登が桐生の買継商・三代目岩本茂兵衛に嫁いだ縁で桐生を訪れている。天保２年（1831）秋に３週間ほど滞在した際、大間々や足利、太田、深谷などを周遊し、『毛武游記（もうぶゆうき）』という優れた紀行文と山や川、町並みなど多数のスケッチ画を残している。崋山が３９歳のときであった。

行路は江戸の板橋から熊谷まで中山道を進み、熊谷から妻沼～太田を経て桐生へ至る、二日間でほぼ１００キロの距離を歩いている。武士である崋山は刀を帯び、わらじばきで荒川・利根川・渡良瀬川の大河を渡る旅は、現代人からみると超人的な体力であったと言える。旧暦１０月１１日午後、弟子高木梧庵とともに江戸を出発、翌日夜遅く桐生新町二丁目にあった岩本家に到着した。滞在中は、美和神社から雷電山（水道山公園）、小倉峠、富士山（ふじやま）山頂から眺望してたくさんのスケッチを描いて過ごした。桐生周辺の多くの人たちとも交流し、武士、文人、職人、農民、女性など立場や身分にこだわらず、誰とでも愉快に談笑し、話に興が乗ればしばしば徹夜で議論した。１１月５日まで滞在し、翌日次の地・熊谷付近の三ヶ尻へ旅立っている。

雷電山より桐生の町（現在の水道山公園からの桐生の眺め）崋山画

桐生織物が結んだ崋山と桐生。その旅路の記録からは何事にも好奇心旺盛で、自由闊達でありながらも人に優しい崋山の人間性が余すところなく伝わる。崋山にとって田原藩家老になる直前の、束の間のひとときを過ごしたもので、この点においても貴重な記録と言える。

所 在 地　桐生市と周辺
代 表 者　岡田 幸夫（崋山と歩く会代表）